

国語

令和八年度入学試験問題

受験上の注意

- 一、監督の指示により、受験する科目の解答用紙を使用してください。
- 二、解答用紙に受験番号（算用数字）、氏名、フリガナを記入し、受験番号および該当する試験日をマークしてください。記入については解答用紙の注意事項に従ってください。
- 三、問題冊子と解答用紙の解答番号を間違えないように注意してください。
- 四、国語の問題は、選択問題があるので、下記の【表】の指示に従い解答してください。
- 五、国語の問題は、二～四十二ページにあります。試験開始の合図があったら、まずページ数を確認してください。
- 六、試験時間中は、受験票を机上の受験番号の下に呈示しておいてください。
- 七、質問、その他用件があるときは、手を挙げて合図してください。
- 八、試験時間中の退室は認めません。
- 九、試験時間は六十分です。
- 十、この問題冊子は持ち帰ってください。

開始の合図があるまで開かないでください



【表】 下記の印に従い解答してください。

○印… 必答 △印… いずれか一つを解答してください	共通問題	一 (現代文)	二 (現代文)	選択問題	三		
					ア (現代文)	イ (古文)	ウ (漢文)
全学部		○	○		△	△	△

一次の文章を読み、後の問に答えなさい。

近代の政治思想の特徴としては、依存することへの極度の恐怖を指摘することができるだろう。この場合、「依存 (dependence)」と対比されるのはもちろん、「自立 (independence)」である。

政治を担う市民は、自立した存在でなければならぬ。他者に依存したままでは、自らを律することもできないからである。

A、人々が政治の領域に参入するにあたって、まず確保しなければならないのは、他者への依存からの脱却である。このような考えが、近代政治思想史において繰り返し説かれてきた。

B、他者の恣意的な意志に従属しないことをもって自由の本質とみなす伝統は、古代ギリシア・ローマ以来のものである。主人に従属する奴隷と対比されるのは、自由な市民である。そうだとすれば、自由な国家とは、他国の支配や自国の君主の恣意的な統治に屈することなく、市民が自らの国のあり方を決定できる国家であった。このような意味で、「個人の自由」と「国家の自由」が C に捉えられる伝統は、西洋政治思想史の一つの精神的背骨を形成してきた。

とはいえ、近代の政治思想においては、「依存」問題はもっぱら個人にフォーカスがあたることになる。そこで何よりも重視されたのは、個人が他の個人に依存しないことであった。個人の自由と国家の自由をつなげて理解する伝統はむしろ衰退し、個人の自由それ自体が議論の中心となったのである。【I】

政治社会を構築するにあたって、人々は所与の依存関係をすべて清算して、完全に自由で平等な諸個人となる必要がある。そのような諸個人の契約によって打ち立てられた国家だけが、正当なものとなるであろう。このように説く社会契約論は、個人の依存を嫌う近代の政治思想の代表的なものである。

依存への恐怖を強調した主たる思想家としては、やはりジャン＝ジャック・ルソー<sup>(注1)</sup>をあげねばならない。『人間不平等起源論』において、ルソーは社会に存在する不平等がどこから生じたのかを探っている。その際に焦点となったのが、やはり「依存」であった。

ルソーにいわせれば、自然状態において不平等は存在しなかった。なぜなら、そもそも人間の間に D な社会的関係は一切存在せず、各人はそれぞれ自足した生活を送っていたからである。人間に備わっているのは、ただ自己保存の本能と、他者の痛みや苦しみに感応する憐れみの情<sup>あわ</sup>だけであり、ある意味でそれだけで十分だった。【II】

ところが、人間の間には、いつしか相互依存の関係が生まれてくる。この関係こそが、あらゆる悪徳の源泉であった。人は次第にこの関係なしには生きていけなくなり、やがて嫉妬や妬みの感情が人々を支配するようになる。他人の顔色をうかがって暮らす人々の関係はあたかも「鉄鎖」のようになり、やがて所有権の確立がこの「鉄鎖」を完成させた。

このように説くルソーにとつて、<sup>(1)</sup> 依存は最終的には支配—服従関係につながるものであった。「従属のきずなどというものは、人々の相互依存と彼らを結びつける相互の欲望とからでなければ形成されないのだから、ある人を服従させることは、あらかじめその人間を他の人間がいなくてはやっていけないような事情の下におかないかぎり不可能である」。

ここにあるのは、他の人間に依存することが従属につながる以上、そもそも他の人間を必要とすることそれ自体を悪とみなす思考である。しかし、人が他者に依存することはそれほど悪いものなのだろうか。

実をいえば、このような依存への恐怖は、現代の政治哲学においても幅広くみられるものである。一例としては、およそルソーとは異なる思想家と思われている<sup>(注2)</sup> フリードリヒ・ハイエクがあげられる。『隷従の道』において社会主義の計画経済を批判したハイエクは、『自由の条件』においてさらに踏み込んで自由についての原理的考察を行っている。彼にとつての自由とは「強制的排除」であり、この場合、「強制」とは人を他者の恣意的な意志に従属させることであつた。

これに対しハイエクが掲げるのが「法の支配」である。ハイエクにとつての「法の支配」とは、諸個人が自らの行動を決定するにあたって、事前にあらかじめ一般的なルールが示されていることを意味する。重要なのは、恣意的な立法権力によつて時々のルール変更がなされないことであり、また特定の個人や集団を狙い撃ちした個別的立法が行われないことである。【III】

ハイエクといえば、市場を絶対視する思想家というイメージが強い。とはいえ、実際にその著作を讀んでみるとその印象はやや

異なる。彼を突き動かしているのは市場メカニズムへの信頼という以上に、他者の意志に従属することに対するキビ感<sup>(ア)</sup>である。他の個人の恣意的な意志に振り回されるくらいなら、形式的で一般的なルールに従う方がはるかにいい。もつとも悪いのは、他者のさじ加減次第という状態に置かれることである。<sup>(2)</sup>ハイエクが市場を評価したのも、それが非人格的なメカニズムであることによる部分が少なくなかったはずだ。

他者の恣意的な意志への従属を恐れているのは、ハイエクだけではない。新たな生活保障の構想として現在脚光を浴びている、いわゆる「ベーシック・インカム（基礎所得保障）」論にしても、根底にあるのはやはり他者へ依存することへの恐怖ではなからうか。

（中略）

ここにみられるのはやはり、他者の判断やサイリヨウ<sup>(イ)</sup>に依存することへの恐怖である。何よりも避けるべきは、特定の個人の意志に左右されることである。それと比べれば、非人格的で一般的なルールや **E** に従うことは、はるかにましである。このような発想は、今日の多様な政治哲学的思考にも広く浸透しているのではなからうか。【IV】

近代の政治学において繰り返し表明されてきた依存への恐怖であるが、これに対する異議申し立てが、意外な角度からなされることになる。<sup>(3)</sup>「ケアの倫理学」からの問題提起がそれである。

子どもや高齢者、障害をもつ人々など、世の中には他者の支援を必要とする人々がたくさんいる。いやむしろ、他者による配慮をまったく必要としないという人の方が、例外的なのかもしれない。誰にも子どもの時期はある。この世に生まれ落ちた瞬間から「自立」した人間など、いるはずもない。そして人は、いつの日か確実に老いる。【V】

そうだとすれば、人が「自分は他者に依存していない」と思える期間は、人生のうちの一定の期間に過ぎない。さらにいえば、そのような期間においてすら、人間はつねに他者からの支援を必要としている。

そうだとすれば、「依存」とは、人間にとってけっしてキヒすべき対象ではなく、むしろ人間という存在にとって、きわめて本

質的な状態ではなからうか。そして、「人間は他者に依存せずには生きていけない」という事実から目をそらすことは、人間とその社会を考える上で、むしろきわめて深刻なバイアスをもたらすのではないか。ケアの倫理学はそのように問いかけた。

しかしながら、ここまでも繰り返し論じてきたように、近代の政治思想においてつねにモデルとなったのは、「F」した個人であった。「G」した諸個人から成る社会を構想するにあたって、「H」は悪であり、子どもや高齢者、障害者などを手助けするケアの活動は、その理論のどこにも位置を占めることがなかった。

(中略)

問題なのは、このような思考の下、人間がもつ脆弱性<sup>ぜい</sup>が見失われたことである。人間が本質的にヴァルネラブルな存在であることは隠蔽され、むしろルソーがいうように、「他の人間がいなくてはやっていけない」ことが悪とみなされるようになった。

(宇野重規『民主主義のつくり方』問題作成上、一部を改変した)

(注1) ジャン＝ジャック・ルソー 一八世紀に活躍した哲学者、政治思想家

(注2) フリードリヒ・ハイエク 二〇世紀に活躍した経済学者、哲学者

(注3) 「ベーシック・インカム(基礎所得保障)」論 すべての国民へ無条件に定額の現金を定期的に支給し、最低限の生活を保障しつつ既存の社会保障を簡素化しようとする制度構想

(注4) ヴァルネラブル 傷つきやすい、脆弱な

問一 傍線部分(ア)、(イ)と同じ漢字が使われているものをそれぞれ一つ選び、マークしなさい。解答番号は(ア) 1、

(イ) 2。

(ア) キヒ

① 条約をヒジユンする

② ヒキンな例を挙げる

③ 公職者をヒメンする

④ ヒライシンを設置する

⑤ ヒルイない才能を發揮する

(イ) サイリヨウ

① テイサイを保つ

② セキサイ車を運転する

③ サイシンの注意を払う

④ 作物をサイバイする

⑤ サイハイを振る

問二 空欄A、Bに入る語句の組み合わせとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 3。

① A とにかく B むしろ

② A しかし B そして

③ A その上で B 例えば

④ A それゆえ B もちろん

⑤ A もしくは B しかし

問三 空欄C、Dに入る語句の組み合わせとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① C 恣意的 D 依存的
- ② C 包括的 D 共感的
- ③ C 対比的 D 自立的
- ④ C 応用的 D 包括的
- ⑤ C 連続的 D 恒常的

問四 傍線部分(1)「依存は最終的には支配・服従関係につながるものであった」とあるが、それはどういうことか。その説明と

して、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 自然状態にある社会的関係が人々の嫉妬や妬みの感情を容認し、それが「鉄鎖」の完成へと帰結したということ
- ② 他の人間への依存が従属につながり、やがて政治社会における所有権の考え方も放棄されていったということ
- ③ 他人との関係なしに生きていけなくなるが、人間の間に従属関係が生じてしまう原因になったということ
- ④ 他者の痛みや苦しみに感応する憐れみの情が人間に備わっていたことが悪徳の源泉であったということ
- ⑤ 社会の進展にしたがって、他の人間を必要とすることそれ自体を悪とみなす思考が強化されていったということ

問五 傍線部分(2)「ハイエクが市場を評価した」とあるが、この理由の説明として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。

い。解答番号は 6。

- ① ハイエクにとって「法の支配」は否定されるべきものであったのに対して、市場は絶対視されるべきものであったため
- ② 「強制の排除」という自由が「法の支配」を脅かすため、それらを形式的で一般的なルールで統制すべきだと考えたため
- ③ ハイエクは他者の意志に従属することを嫌い、市場が人々の自由の保障に向けて有効であると捉えたため
- ④ 市場が有する非人格的メカニズムが恣意的な立法権力を排し、豊かな経済的メリットをもたらすと考えたため
- ⑤ 市場メカニズムを信頼することが、「ベーシック・インカム(基礎所得保障)」論の成立にとって重要であると考えたため

問六 空欄Eに入る語句として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 7。

- ① 制度
- ② 組織
- ③ ケア
- ④ 恣意
- ⑤ 集団

問七 傍線部分③「ケアの倫理学」に関する説明として、**不適当なもの**を一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

① 「ケアの倫理学」は支援を必要とする人々を峻別するものでなく、むしろこのように依存状態にある人間を峻別する態度が深刻なバイアスをもたらすと主張している

② 「ケアの倫理学」は人間がもつ脆弱性に感応的であるため、ルソーが『人間不平等起源論』で提示した近代社会への洞察に対して同意するものではない

③ 「ケアの倫理学」によれば他者からの支援をまったく必要としない人間は存在せず、したがって「自立」した人間は想定されない

④ 「ケアの倫理学」とは依存することへの恐怖に対して異議申し立てをおこなうものであり、ゆえに「ベーシック・インカム（基礎所得保障）」論に親和的である

⑤ 「ケアの倫理学」は他者との相互依存を肯定的に解釈するという点で、ルソーやハイエクなどの多くの近代政治思想史に対して考え方を異にする

問八 空欄F、Hに入る語句の組み合わせとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

① F 依存 G 自立 H 自立

② F 依存 G 自立 H 依存

③ F 依存 G 依存 H 自立

④ F 自立 G 依存 H 依存

⑤ F 自立 G 依存 H 自立

⑥ F 自立 G 自立 H 依存

問九 この本文には次の一文が欠落している。本文中の【Ⅰ】～【Ⅴ】のどの箇所<sup>10</sup>に補えばよいか。最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は

最後の瞬間まで、けっして人の頼りにならないでいることは、事実上不可能である。

- ① 【Ⅰ】 ② 【Ⅱ】 ③ 【Ⅲ】 ④ 【Ⅳ】 ⑤ 【Ⅴ】

問十 本文の内容に合致するものを二つ選び、マークしなさい。解答番号は

① ルソーとハイエクはお互いに異なる人間観や社会観にもとづき議論を展開した思想家であるため、両者は共通点以上に相違点が顕著に確認される

② 「ケアの倫理学」は人間の本質的な状態として「依存」を定義するが、こうした指摘はこれまでの近代政治思想史において等閑視されてきた

③ ルソーは他者に依存することへの恐怖を強調したが、このルソーの考察を自身の研究対象として据えたのがハイエクであり、彼は市場メカニズムがそれを解決すると主張した

④ 近代の政治思想史においては「個人の自由」と「国家の自由」を関連させて捉える伝統が見出<sup>みいだ</sup>される。「ケアの倫理学」とはこのうち「国家の自由」に関する議論に位置づくものである

⑤ 近代の政治思想には人間のもつ脆弱性が見失われているという危険性がある。そうした近代の政治思想の形成に貢献した代表的な人物の一人としてルソーが挙げられる

この頁は白紙です

二 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

東アフリカの草原砂漠を走りまわっているライオンをつかまえるのには、大きな節ふたひをつくってそれでそこらをしゃくって、中の砂をふるい落として、あとに残ったライオンをつかまえる、というのは笑話だが、いったいこのライオンは、死んだらこの世に何を遺のこすか、というと、何も残らない。残骸アの骨や皮は陽ひに焼かれて砂漠の嵐にさらされて、いずれ腐って解体して土に帰してしまう。トラは死して皮を残すというが、このトラの皮も、人間が滅びる時には、いっしょに滅びてしまう運命にある。

どんな動物でも、その他の生きものでも、生きている間モノを食べ、排泄物はいせつぶつを出して、死んで行ったあとは、何も残らない。排泄物が多少土を肥やすぐらいのことで、Aに帰ってしまう。幾つかの例外があれば、たとえば古世代の石灰岩(注1)が、紡錘虫ほうすいちゅうや

(注2)サンゴ虫の石灰質の骨格や殻で成り立っていると、貝が化石を遺すとかといったけど、あるいは、石炭や石油が、古い植物や動物が、昔栄えて滅びたなごりとして遺っている、といったぐらいで、(1)その生存の痕跡が、地球の歴史に何かをプラスして行った、というような形跡は、ほとんどない。

ところが、ナイル河のほとり、エジプトのギザのピラミッドは、古代エジプトの遺跡(イ)であるばかりでなく、人類の遺跡であって、この頃流行の宇宙SFのオカシな宇宙人たちが、地球を征服して、人類が滅びるようなことがあっても、あのギザのピラミッドは、あのまま遺のこつて、人間のある時代のいとなみを、永遠にものがたることになる。

人間は、(2)この地上に新しく現れた不思議な生きものは、じつは、動物やその他の生物とちがって、その一人でもが、この世に生きて、(注3)たれて、死んだあと、何も遺さない、ということはない。(注4)どこかの陋巷ろうこうの、どんな身寄りのない貧しい老人でも、生きて働いて何かをしたその痕跡は、なにかの部分となって、必ず残っているはずだし、裸で生きて死んだわけではないから、誰かがその形見分けかたみわけの恩恵を受けるだろうぐらいの、ささやかな遺品を残すだろう。【I】

こういうええわかる通り、人間は一人ひとり、生きている間に、地球に何かのプラスを残してゆく、ごく例外な生きものなのだ。どこかの国で、イナゴの大量発生で、広大な耕地の作物が残らず食い尽されたあと、イナゴが死に絶えると、何も残らない。荒れ

果てた曠野がひろがるだけだ、というようなのは、ちがう。

人間は、子供がたくさん生まれ過ぎて、親を食いツブしたあとも、その一人ひとりが生きて、何かをして、遺産を残すのだ。つまり、人間は生きている間に、地球に何かをプラスして死ぬ。ニューヨークの摩天楼街は、人類が生まれなかった前の地球には、なかった存在で、この存在は、人類が減びたあとにも、<sup>(注5)</sup>有孔虫やサンゴ虫の残骸がつくった石灰岩のように、永遠に地球の上に遺るだろう。人間の一人ひとりが生きて、この世にマイナスを遺して死ぬ、などということは、考えられない。

人間とは、そういう存在なのだ。

人間は、自然の中に生まれ、自然と調和して生きながら、ぜんぜん不自然な、あるいは反自然でさえあることをもしてかしたりする奇怪な生きものだ、ということをもっと広義に解釈すると、<sup>(3)</sup>どのみち自然の中の一点景にすぎない人間がしでかす「不自然」や「反自然」とても大きな眼<sup>め</sup>で見ると、「自然」に過ぎない。孫悟空がどんなにせいっぱいアバレ廻<sup>まわ</sup>っても、ホトケさまの掌<sup>てのひら</sup>の中の遊びに過ぎない、というのと似ているわけだ。

結局、人間とても、自然からハミ出すわけにいかないし、自然の法則というのは常に不変で、ここに「神」の意志の片鱗<sup>へんりん</sup>をうかがえる、とでもいえるのだが、人間と他の生きものとの相異は、他の生きものはただ自然の法則の中で、それに従って生きるだけだが、人間は自然の法則を発見して、それを組み立てて、<sup>(4)</sup>新しい「自然」を創造することが出来る。たとえば、原子力を発見して、それを生きることに応用する、といったようなのも、その一つだ。

神サマは全知全能だから、何ごとも思うままに出来る。神サマの芝居は、自分が創<sup>つく</sup>った筋書を自分で演出するのだから、思うままに作った舞台に、思うままの主人公を登場させて、万事筋書の通りに、思うままの<sup>こと</sup>を運ばせて、思うままの結末に持って行くことが出来る。この退屈な芝居にすっかり飽き飽きした時、神サマは最後に人間を、自分に半分ぐらい似せてお創りになって、今度は筋書を書かずに、人生を自由に歩かせてみることにした、——といったあんばいに、人間はつくられていたような気がするのだが。 B、この劇では、主人公は舞台をつくりかえることも出来る。人間にとっての「自然」は、そういったものだ。人間が「自然」に、最高のお手本を発見するのは、そこに「神」の力量を認めるからだ。と同時に、自分の腕前に酔うことが出来る

のも、そこに「神」の、C「自然」の力量を認めるからだ。

それにしても、『弁慶柱』<sup>(注6)</sup>も『巒岳』<sup>(注7)</sup>も、一方はアリゾナの曠野に、一方は熱帯アフリカのジャングルに、堂々と聳え立って、今も見事に繁茂を続けているのに、人間のいとなみであるエジプトやギリシアの神殿は、礎<sup>いしずえ</sup>は崩れ屋根は落ちて、欠け残った円柱だけが立ちならび、ただ茫々<sup>ぼうぼう</sup>と遠い興亡の歴史のあとを、杖<sup>つえ</sup>を曳<sup>ひ</sup>いてたたずむ旅人に、物語っているに過ぎないというのは、どういうことだろう。

この世で、本当に残るものは、何か？ **【II】**

人間のいとなみだから急いで滅び、自然のいとなみだから長く、悠久に遺るのか。

そうじゃない。

ツタンカーメンもクレオパトラも、アレキサンダーもシーザーも、そのきらびやかな生涯は、ただ権力と富の座に立ちただかつて、天下に号令した虚像に過ぎなかった。号令されたが、わのいとなみであるオリブ畑や、綿畑や麦畑は、ますますひろく耕され、生き生きと生産を続け、乳を出す家畜や卵を産む鶏は、頭数<sup>あたまかず</sup>も増え、質も改良されて、人生をゆたかにしている。黄金<sup>きん</sup>の椅子<sup>すわ</sup>に坐<sup>すわ</sup>って高いところから号令した権力者たちは、今、どこへ行った？ **【III】**

外国の話ばかりじゃない。たとえば、信長も秀吉も家康も、これに仕えた英雄豪傑の諸君も、今、——どこへ行った？ その時は権力の象徴だった豪壮な城も、今は苔<sup>こけ</sup>むして崩れかけた石垣にツタ、カズラがはい、ただ昔の面影を忍ぶばかり。観光客集めに復元されたイミテーションの新しい城の一角で、絵葉書売りの店が、もの珍らしげに人の輪に囲まれている<sup>(5)</sup>が、せきのやまだ。 **【IV】**

歴史のページをほとんど一人占めしている、こういう英雄豪傑の「偉業」とは、ただ収穫<sup>みいり</sup>のいい田畑の奪い合いに命をかけ、「利益」の上に立つ「権力」を手に入れるために、あらゆる貪婪<sup>どんらん</sup>と残酷をほしいままにして、「人」を殺戮<sup>さつりく</sup>した。その血に塗<sup>まみ</sup>れた手で城を築いて、権力の座を築いた。こういう野郎どものしわざを、歴史は「偉業」とたたえるのだ。この「偉業」のなれの果ての、今となつてのムナしさは、どうだ？

それに反して、奪い合いの対象となった田や畑は、無名の百姓の手で黙々と耕し継がれ、それが続けられて、ますますひろく、ますますみのりよく改良されて、今日に伝えられ、ゆたかに作物が茂って生きている。滅びるものは何で、遺るものは何か？

畢竟、悠久なのは「自然」と、その「自然」に密着し、「自然」をお手本として生きる人間のいとなみだ。人間は「自然」を人間なりに変えることが出来ても、たぶん、「自然」を訂正することは出来まい。正しいものは訂正しようがないからだ。たとえば、原子力は自然を訂正したのじゃない。「自然」の中に秘められた法則を組みなおして、それを新しいエネルギーとしただけのことなのだ。【V】

(龍膽寺雄『シャボテン幻想』問題作成上、一部を改変した)

(注1) 紡錘虫 古代生物の一種で、身体に石灰質の複雑な殻をもつ

(注2) サンゴ虫 サンゴを構成する生きものを指す。サンゴの骨格を成す

(注3) たれて(たれる) ここでは排泄物を出すことの意味

(注4) 陋巷 狭くて汚い町

(注5) 有孔虫 海に生息する単細胞生物

(注6) 弁慶柱 大型のサボテンで柱サボテンの一種

(注7) 巒岳 大型の多肉植物の一種

問一 傍線部分(ア)、(イ)と同じ読みをする漢字を含む熟語をそれぞれ一つ選び、マークしなさい。解答番号は(ア) 12、

(イ) 13。

(ア) 残骸 ① 酷暑

② 干害

③ 積雪

④ 資材

⑤ 瓦解

(イ) 遺跡

① 異端

② 貴人

③ 収集

④ 座席

⑤ 軌跡

問二 空欄Aに入る慣用句として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 14。

① 三つ子の魂

② 河童かっぱの川流れ

③ 鳥なき里の蝙蝠こうもり

④ あとの祭

⑤ もとの木阿弥もくあみ

問三 傍線部分(1)「その生存の痕跡が、地球の歴史に何かをプラスして行った」とあるが、「地球の歴史に何かをプラスして」

行かない存在として、具体的にどのようなものの生存が挙げられるか。適当なものを二つ選び、マークしなさい。解答番号

は 15 (解答欄一行に二つマークすること)。

① ライオン

② 古代ギリシア人

③ 神サマ

④ イナゴ

⑤ 古代エジプト人

問四 傍線部分(2)「この地上に新しく現れた不思議な生きもの」と人間がいわれるのはなぜか。最も適当なものを一つ選び、

マークしなさい。解答番号は 16。

- ① 人間は、他の生きものたちが二足歩行をするから
- ② 人間は、貨幣経済を発明し、発展させてきたから
- ③ 人間は、地球を征服してピラミッドを作ったから
- ④ 人間は、生前の活動が死後も何らかの形で残るから
- ⑤ 人間は、親の財産を食いつぶしてしまう存在だから

問五 傍線部分(3)「どのみち自然の中の一点景にすぎない人間がしでかす「不自然」や「反自然」とても大きな眼で見ると、

「自然」に過ぎない」とはどのようなことか。その説明として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 17。

① 社会制度や科学を発展させて「自然」にあらがおうとしても、人間は生老病死という「自然」の法則から逃れられないこと

- ② 人間も結局は他の動物や植物と同じく、何も残さずに消えてしまう「自然」の一部だということ
- ③ 科学の進展は「自然」を作り替えることもあるが、作り替えた「自然」も「自然」とみなせるということ
- ④ 人間のいとなみは全知全能の神に完全にコントロールされたもので、その世界の中で完結しているということ
- ⑤ 人間のこととはすべて「自然」の範囲に収まるもので、「反自然」や「不自然」などありえないということ

問六 傍線部分(4)「新しい「自然」を創造することが出来る」とあるが、人間が「創造」した「新しい「自然」」の例として、  
適当なものを二つ選び、マークしなさい。解答番号は  (解答欄一行に二つマークすること)。

- ① ガスを使って調理をする
- ② ペットをかわいがる
- ③ 谷川の水を飲む
- ④ 風力発電を開発する
- ⑤ ほら穴の中で眠る

問七 空欄B、Cに入る語句の組み合わせとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① B そのうえ C それから
- ② B ところが C いわば
- ③ B だから C つまり
- ④ B だが C たとえば
- ⑤ B ところで C いや

問八 傍線部分(5)「せきのやまだ」の意味として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 十分だ
- ② ちょうどいい
- ③ 不十分だ
- ④ 精いっぱいだ
- ⑤ 簡単だ

問九 この本文には次の一文が欠落している。本文中の【I】～【V】のどの箇所に補えばよいか。最も適当なものを一つ選び、  
マークしなさい。解答番号は 。

人間にとっての「自然」は、ただの「自然」よりも間口は広いし、奥行きも深い。

- ① 【I】
- ② 【II】
- ③ 【III】
- ④ 【IV】
- ⑤ 【V】

問十 本文の内容に合致するものを二つ選び、マークしなさい。解答番号は  (解答欄一行に二つマークすること)。

- ① 世界各地の遺跡は復元を繰り返し、時の権力者とその地域の民との関係を現在に伝え続けている
- ② 人間は自然の法則を発見し、そこから新たな自然を創造する。この点が他の生物との決定的なちがいである
- ③ この世の法則は神のような絶対的な存在によって創られたという考え方は、世界中の宗教に共通する
- ④ 丁寧な耕された農地だけは、この世に永遠に残り続ける。ゆえに、農夫たちこそ真の偉人である
- ⑤ この世に長く残るのは、権力者の偉業を示す遺跡よりも、名もない人々の続けてきた生活のいとなみである

この頁は白紙です

以降は選択問題です。表紙の【表】の指示に従っていずれか一つを選択し解答してください。  
問題冊子の解答番号と解答用紙の番号を間違えないように注意してください。  
選択問題を二つ以上解答した場合、得点にはなりませんので十分注意してください。

### 三ア 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

一般に想定されている因果関係は、思考がまずあって、それが言語によって表現される、という順序である。シリメツレツ(ア)にしか説明できない人は、「自分の考えをよく整理してから話しなさい」などと注意されたりする。だが、ここで反省してみるとよい。どうしても語りたいたいこと、なんとしてでも聞いてもらいたいことはたいてい、語るのが難しいこと、うまく言えないことではないだろうか。語ることが困難なこと——もしかすると語り得ないこと——こそ、語るに値すること、語らねばならないことである。

だから、その語りが混乱していたり、なかなか言葉が出てこなかったりする人に関して、ただちに、その思考も混乱し、貧しいと断じるべきではない。<sup>(1)</sup>まったく逆かもしれないからだ。つまり、その人が言いたいことがあまりにも衝撃的であったり、あまりにも繊細であったり、あまりにも豊饒ほうじょうであったりするがゆえに、うまく話すことができず、口籠くちどもっている、ということもあるからだ。

\*

つまり、人がほんとうに大事なことを話すとき、その「大事なこと」は初めから、言語的に明快に分節されたアイデアとして存在しているわけではない。それでも、その大事なことについて語り始めると、しばしば次のようなことを経験するだろう。語っている最中に、自分でも思ってもいなかった言葉が出てきて、「私の言いたかったことはまさにこれだった」と自分で発見する、ということ、である。思考があつて、それが言語として外化されているのではなく、<sup>(2)</sup>語ることを通じて、思考が明晰めいせきなものとして形成されることがあるのだ。

(中略)

私たちが語ることそれ自体に真の意味を感じ、語ることに<sup>よむ</sup>歓びを感じるのは、このようなときであろう。まさに語ったことを

媒介にして、自分の思考を発見するとき。こうしたことは、話し言葉でだけではなく、書き言葉においても生ずる。書いていると、執筆前には予定していなかった言葉、思いついてさえいなかった言葉が出てくることもある。自分が書いてしまったことを通じて初めて、自分が本来書きたかったことが何であったかを自覚する。こうした発見にこそ、書くことの快楽がある。私自身が書く理由も実のところこの点にある。<sup>(3)</sup> 私は、事前に細かく構想を練ってから執筆にとりかかる方ではあるが、それでも、まさに書き続けることを通じて、書くべきだったこと、書きたかったことを発見している。そのような発見の欲びがなければ、わざわざ書くことはなかっただろう。

フランスの哲学者ルイ・アルチュセールは、フランス語の 'prise (掴むこと)' と 'surprise (驚き)' という二つの語の間を戯れつつ、今ここで述べているようなタイプの「言語をめぐる経験」を記述している。すなわち、あるアイデアを掴む (prise) 者は、自分が成し遂げてしまったことに驚かされる (surprise させられる) のだ、と。

自分の口から出た言葉、自分の指が書きつけた文字に驚かされる？とすると、ここで奇妙なことが起きていることになる。私を驚かせているその言葉、その文字は、私の身体から発せられているのに、他者——誰とも特定できない他者——に帰属しているかのように感じられているのだ。あたかも、(不定の) 他者が、私の身体を通じて、語り、書いているかのような感覚が生じていることになる。

それにもかかわらず、つまりその言葉は、私にコントロールされた私の言葉ではなく、まるで他者の言葉であるかのように感じられているにもかかわらず、私のナイオウの真実、<sup>(4)</sup> 私が本来言いたかった真実を言い当てているとも感じられている。ここにあるのは、<sup>(4)</sup> 他者性と自己性の間の短絡である。

\*

動詞のいわゆる中動態 middle voice が指し示しているのは、以上のような経験である。この経験は能動態 active voice では記

述できない。つまり、私自身がその言葉を意図的に制御しているようには感じられない。しかし、受動態 *passive voice* にも相応しくなく、つまり、私は何か外部のものに強いられて語っているわけではない。能動態でも受動態でもない中動態こそ、今述べているような言語についての体験にふさわしい。

現在のヨーロッパの諸言語からは消え去ってしまったが、古代のインド・ヨーロッパ語には、能動態でも、受動態でもない動詞の相、中動態があった。それは、「形の上では受動態だが、意味的には能動」となる動詞だ。ここで見ている現象が、まさにこの通りである。「私が語っている」と、A で言うほかないのだが、しかし、私自身には、それが B の相で体験されている（自分ならざる者に語らされているかのように感じられている）。

中動態的なやり方で、人は、まさに自らが言うべきことを見出す<sup>みいだ</sup>。それは、まぎれもなく私の言いたいことであつたはずなのに、他者性を帯びている。いや、その他者性こそが逆に、語られていることがほかならぬこの私にとっての真実であることの証にすらなっているのだ。

\*

なぜ、言語をめぐるこのような経験について説明してきたのか。私たちが、生成 AI を日常的に活用するようになったとき、このような体験は、私たちの生活の中から徐々に失われていくだろう、と推測されるからである。言語をめぐる中動態的経験は、生成 AI との「会話」の経験に、いわば植民地化されてしまうのだ。どうして、そのように予想するのか。それは、二つの経験がある意味で似ているからである。「ある意味で」と述べたのは、両者はまさに「似て非なるもの」だからだ。確かに似ている。しかし違う。

あなたが、どうしても伝えたい、どうしても言いたい何かがあるのだが、適切な言葉が見つからず、それを具体的に表現することもできず、苦勞していたとしよう。そこであなたは生成 AI に、漠然とした状況だけを教え、代わりに書いてもらう。たとえば

あなたは、つい先日出会ったある人物に、今までに感じたことのないような複雑な思いを抱き、それを伝えたいのだが、よい言葉が見つからない。生成AIへの質問文の中に、その人物とあなたとの関係や出会いの状況などを書き入れておけば、生成AIは、きつと巧みなラブレターを数秒で書いてくれるに違いない。あなたは、自分が書いてもこんなふうには書けないだろうと感じ、それを「私の手紙<sup>(5)</sup>」としてその人物に送るだろう。

ひとたび生成AIから回答をもらってしまえば、人はその段階で、自分の定かならぬ思考、自分の語りがたい感覚を、何としても言葉にしようとする努力を放棄してしまうだろう。生成AIの回答で十分だ、それこそが私が思っていたことだ、ということにしてしまうからだ。前項で述べたように、私が、何とか言いたかったアイデアを「擱んだ (priso)」と思うとき、言葉は、まるで他者からやって来たかのように感じられている。そして今、生成AIを使ったときにも、言葉は、ほんとうに他者からやって来ている。目の前にあるこの機械から、である。人間の心理に本来、他者からやって来たかのように感受される言葉をこそ、「私のもの」として反転して受け取る傾向性があるがために、人は、機械という他者から出て来た言葉を、「私のアイデア」として採用することにさしたる抵抗を覚えない。

人間の思考の自律性、思考の自由は、能動的なものではなく、中動(態)的のものである。外(他者)からやって来たと感じられる言葉を通じてこそ、「私の思考の真実」が表現される。だが、中動態的な経験は、容易に受動態へと転化してしまう。このことが、生成AIの影響に対する人間の脆弱性<sup>(せいじやく)</sup>の究極的な原因となっている。自律性<sup>(りつりつせい)</sup>がもともと中動態的な構成をもつがゆえに、人間の思考は、生成AIに受動的に影響され、その回答に誘導されやすいのだ。

(大澤真幸「生成AIが人間に近づいている? いやそうではなく……」問題作成上、一部を改変した)

問一 傍線部分(ア)、(イ)と同じ漢字が使われているものをそれぞれ一つ選び、マークしなさい。解答番号は(ア) 51、

(イ) 52。

(ア) シリメツレツ

① ゴリムチユウで途方に暮れる

② ハクリタバイで勝負する小売店

③ 長所と短所はヒヨウリイッタイだ

④ リゴウシユウサンを繰り返す

⑤ リヒキョクチヨクを明らかにする

(イ) ナイオウ

① 師範からオウギを伝授される

② オウシツに伝わる財宝

③ 祖父が大オウジヨウを遂げた

④ 無着陸で太平洋をオウダンする偉業

⑤ 難しいタイオウをせまられる

問二 傍線部分(1)「まったく逆かもしれないからだ」とあるが、何と何が「逆かもしれない」ということか。その説明として、

最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 53。

- ① 先に思考があつて、次にそれを表す言語があると考えられがちだが、逆に、まず言語があつて、次に思考があるのかもしれない
- ② しゃべり方がたどたどしい人間は思索も混乱していると考えられがちだが、逆に、思索の深さゆえスムーズに話すことができるのではないのかもしれない
- ③ すらすらよどみなく話ができることが美德だと考えられがちだが、逆に、冗長でも丁寧にわかりやすく話せることが美德かもしれない
- ④ 誰かにどうしても伝えたいことは理路整然と話すべきだと考えられがちだが、逆に、ぎこちなく語ることによってこそ切実さが伝わるかもしれない
- ⑤ 語りえないことは沈黙しなければならないと考えられがちだが、逆に、語りえないことこそほんとうに語るべきことなのかもしれない

問三 傍線部分(2)「語ることを通じて、思考が明晰なものとして形成される」とあるが、それを説明する具体例として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 大学の授業でひとりの学生が、しどろもどろになりながら口頭発表していた。しかし、発表後のディスカッションで話あってみると、その学生は多くの知識をもとに非常に鋭い考察をしていたのだと気づくことがある
- ② 著名な先生の講演会に行ったところ、講演者が話した専門用語がよく分からなかったので、ノートにメモをとっておいた。しかし、帰宅後に講演者の語り口を思い出しつつ調べてみると、意外なほど簡単に理解できることがある
- ③ 翌週の授業で発表するため、配付資料とともに読み上げ用の原稿も作成し、何度も繰り返し練習しておいた。しかし、発表当日になると、緊張のせいだろうか、うまく話せなくなってしまうことがある
- ④ 授業で配付されたプリントをすべて生成AIに要約させた。黙読したところ問題がないように思われたが、しかし、声に出して読み上げると、不正確な箇所気づいたので、生成AIに依存してはいけないと反省する機会になることがある
- ⑤ 友人と映画を見に行ったところ、ラストシーンで主人公が恋人を裏切る場面についてモヤモヤした気持ちになった。しかし、帰路、友人とその場面について話していると、「主人公は嫉妬していたのだ」と、しっくり表現できることがある

問四 傍線部分(3)「この点」とあるが、具体的な内容について述べたものとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 語ったことを媒介に自身の思考が発見され、歓びを感じられる点
- ② 話し言葉ならではの現象が、書き言葉でも生じることに気づく点
- ③ 書いた言葉を通じ、執筆前に予定していた言葉の正確性を再確認できる点
- ④ 実際に執筆すると、書くべきことを表す予想外の言葉が出てくる点
- ⑤ 事前の構想通りに、本来書きたかったことが書ける点

問五 傍線部分(4)「他者性と自己性の間の短絡」とはどのようなことか。その説明として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 56。

① 「自己性」とは、「prise (掴むこと)」とあるように、自分の手で言葉を掴むような感覚であり、「他者性」は、「surprise (驚き)」とあるように、その言葉によって自分以外の誰かを驚かせることを指す。本来、相反する両者が、理屈を超えて同時に生じることを「短絡」と表現している

② 「自己性」とは、「prise (掴むこと)」とあるように、自分の手で言葉を掴むような感覚であり、「他者性」は、「surprise (驚き)」とあるように、その言葉によって自分以外の誰かを驚かせることを指す。本来、相反する両者が、身体性によって因果関係をもつてつながることを「短絡」と表現している

③ 「自己性」とは、「prise (掴むこと)」とあるように、自分の手で言葉を掴むような感覚であり、「他者性」は、「surprise (驚き)」とあるように、その言葉によって自分以外の誰かを驚かせることを指す。本来、相反する両者が、話者が言いたかった真実に理屈を超えて一体化することを「短絡」と表現している

④ 「自己性」とは、ある言葉を自分がしっかりコントロールして用いているような感覚であり、「他者性」は、ある言葉が自分の言葉ではないような感覚を指す。本来、相反するはずのこれらの感覚が、理屈を超えて同時に生じることを「短絡」と表現している

⑤ 「自己性」とは、ある言葉を自分がしっかりコントロールして用いているような感覚であり、「他者性」は、ある言葉が自分の言葉ではないような感覚を指す。本来、相反するはずのこれらの感覚が、身体性によって因果関係をもつてつながることを「短絡」と表現している

問六 空欄A、Bに入る語句の組み合わせとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① A 能動態 B 受動態
- ② A 受動態 B 能動態
- ③ A 中動態 B 受動態
- ④ A 中動態 B 能動態
- ⑤ A 能動態 B 中動態
- ⑥ A 受動態 B 中動態

問七 傍線部分(5)「私の手紙」とあるが、この部分がカギカッコに入れている理由として、最も適当なものを一つ選び、

マークしなさい。解答番号は 。

- ① 生成AIが肉筆で出力したわけではないから、本来の意味の「手紙」ではないと示すため
- ② 生成AIの出力した文章が、まさに「私」が書くようとしていた「手紙」とまったく同一だと強調するため
- ③ 生成AIが出力した文面は自分で考えたものではないから、本来の意味の「私の手紙」ではないと示すため
- ④ 生成AIに情報を入力したのは他ならぬ「私」であるから、真正正銘の「私の手紙」であると強調するため
- ⑤ 生成AIに感情はないから、本来の意味で愛のこもった「手紙」(ラブレター)が出力されたわけではないと示すため

問八 本文の内容に合致するものを二つ選び、マークしなさい。解答番号は 59 (解答欄一行に二つマークすること)。

- ① 人間はみずからの思考を能動的に「掴むこと (prise)」を通じ、思索を深めていく。生成AIはこの過程を奪い、いわば植民地化していくと推測される
- ② 人間の思考には中動(態)的な側面があり、自分が見出したはずの言葉も他者から与えられたように感じることもある。だから生成AIの言葉を容易に「私のもの」と感じてしまいうる
- ③ 人間の思考は、能動的であるはずが受動的でもあるような性格をもつ。だからこそ、生成AIという「他者」の言葉に驚かされ (surpriseさせられ) た場合、快楽を感じる
- ④ 人間は、他者性を帯びた言葉に真実があると感じる傾向がある。だから、もっぱら「他者」の言葉の集積によって回答を作る生成AIとの会話に真実を見出しがちであり、中動態的な経験が生成AIに植民地化される可能性がある
- ⑤ 人間は、まるで他人から与えられたように感じる言葉に真実が宿っているととらえる傾向がある。だから生成AIという「他者」が回答してくれると、そこで思考を停止してしまう場合がある
- ⑥ 人間は、言葉に帯びた他者性を真実の証だと考える傾向がある。だから生成AIというほんとうの他者の言葉を真実だと感じて「私のもの」として採用する場合が多く、アイデンティティが不安定化していく

三イ 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

如月の十日余りのほどにや、善光寺へと思ひ立つ。碓氷坂、木曾の懸路の丸木橋、げに踏みみるからに危ふげなる渡りなり。道のほどの名所なども、やすらひ見たかりしかども、大勢に引き具せられて事しげかりしかば、何となく過ぎにしを、思ひのほかにむつかしければ、宿願の心ざしありて、しばし籠るべきよしを言ひつつ、帰さには留まりぬ。

一人留め置くことを心苦しがり、言ひしかば、「中有の旅の空には、誰か伴ふべき。生ぜし折も一人来たりき。去りてゆかむ折もまたしかなり。相会ふ者はかならず別れ、生ずる者は死にかならず至る。桃花、粧ひいみじといへども、つひには根に帰る。

紅葉は、千入の色を尽くして盛りありといへども、風を待ちて秋の色、久しからず。なごりを慕ふは、一旦の情けなり」など言ひて、一人留まりぬ。

所のさまは、眺望などはなけれども、生身の如来と聞きまゐらすれば、頼もしくおほえて、百万遍の念仏など申して明かし暮らすほどに、高岡の石見の入道といふ者あり。いと情けある者にて、歌常に詠み、管絃などして遊ぶとて、かたへなる修行者、尼にさそはれてまかりたりしかば、まことにゆゑある住まひ、辺土分際には過ぎたり。彼といひ此といひて、慰む便りもあれば、秋までは留まりぬ。

『とはずがたり』

(注1) 善光寺 長野県長野市にある寺。本尊の阿弥陀三尊像が著名で、古来、多くの参詣者を集めた

(注2) 碓氷坂 今の碓氷峠。群馬県と長野県の境にある峠

(注3) 木曾の懸路の丸木橋 長野県にあったという険しい山道に掛けられた丸木の橋。古来、歌に詠まれる名所

(注4) 宿願 以前から神仏にかけておいた願い事

(注5) 籠る 仏堂に参り、一定の期間、昼夜こもつて祈願する

(注6) 中有の旅 死後の世界に行き着くまでの旅

(注7) 千入の色 千度も染料に浸したかのような深い紅色

(注8) 一旦の情け 一時的な感情

(注9) 生身の如来 生きているような姿そのままの仏。善光寺の本尊の阿弥陀如来のこと。死後、冥界から救済してくれると信じられていた

(注10) 辺土分際には過ぎたり 田舎にはふさわしくないほど立派である

問一 傍線部分(1)「げに」、(2)「やすらひ」、(4)「むつかしけれ」、(8)「情けある」の本文中の意味として、最も適当なものをそ

れぞれ一つ選び、マークしなさい。解答番号は(1) 、(2) 、(4) 、(8) 。

(1) げに

- ① 強く ② 本当に ③ 元気に ④ まっすぐに ⑤ 下のほうに

(2) やすらひ

- ① 歩き回って ② 同行者を誘って ③ 宿代を安くして ④ しばらく留まって ⑤ どうしようか迷って

(4) むつかしけれ

- ① 気味が悪い ② 困難である ③ 不快である ④ むさくるしい ⑤ わずらわしい

(8) 情けある

- ① 上品な ② 魅力的な ③ おくゆかしい ④ 情趣を解する ⑤ 恋愛に通じた

問二 傍線部分(3)「事しげかりしかば」の文法的説明として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は

80。

- ① 形容詞連用形＋助動詞連体形＋接続助詞
- ② 形容詞連用形＋助動詞已然形＋接続助詞
- ③ 形容詞終止形＋助動詞已然形＋接続助詞
- ④ 名詞＋形容詞連用形＋助動詞終止形＋接続助詞
- ⑤ 名詞＋形容詞連体形＋助動詞連体形＋接続助詞
- ⑥ 名詞＋動詞連用形＋助動詞連用形＋助動詞已然形＋接続助詞

問三 傍線部分(5)「誰か伴ふべき」の本文中の意味として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は

81。

- ① 誰を連れて行けばよいか考えたい
- ② 誰が誘ってくれるか教えてほしい
- ③ 誰もいっしょに行くことはできない
- ④ 誰といっしょに行くかは前世から決まっている
- ⑤ 誰かがわたしといっしょに行ってくれるだろう

問四 傍線部分(6)「桃花、粧ひいみじといへども、つひには根に帰る。紅葉は、千人の色を尽くして盛りありといへども、風を

待ちて秋の色、久しからず」の解説として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 桃の花と紅葉を例にあげて、美しい盛りがあつてもいずれば衰えるという道理を対句的に述べている
- ② 桃の花や紅葉が散るように死は必然なので、諦めて生きるのがよいという教えを格言風に述べている
- ③ 美しい桃の花や紅葉がいずれは衰えることを知ることが、無常観を悟るために必要だと教訓的に述べている
- ④ 桃の花や紅葉が美しいのは一時的なもので、永遠の命こそ目指すべきであるという目標を比喩的に述べている
- ⑤ 桃の花は散つてもまた根から新しい芽が生えてくるが、紅葉は散ればそれで終わりになるということを対比的に述べている

問五 傍線部分(7)「一人留まりぬ」とあるが、作者はそうするため、同行者にどのような理由を挙げて説明しているか。最も

適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 人が必ず死ぬものだということは誰もが知っているので、桃の花や紅葉を楽しむみたいという一時的な感情を大切にしなければならぬから
- ② 人は生まれるときも死ぬときも一人なので、別れを寂しいと思う一時的な感情は忘れて、桃の花や紅葉の盛りを一人で十分に楽しむべきだから
- ③ 人は生まれるときも死ぬときも一人なので、一人で残していくのは残酷だと考えることは、自分勝手な思い込みによって生じる一時的な感情に過ぎないから
- ④ 人は生まれるときも死ぬときも一人であるし、生きていれば出会いと別れは必然で、死は避けられないので、別れがたいと思うのは一時的な感情に過ぎないから
- ⑤ 人は生きている限り出会いと別れを繰り返すものであるし、別れをつらいと思うのは一時的な感情で、それよりももっとつらいのはたった一人で死んでいくことだから

問六 傍線部分(9)「彼といひ此といひて、慰む便りもあれば、秋までは留まりぬ」の解釈として、最も適当なものを一つ選び、

マークしなさい。解答番号は 84。

- ① 寂しい田舎ではあるものの、あれこれ言ってくる都からの手紙があつて、心が慰められたので、秋までは滞在した
- ② 頼りになる修行者に相談したり、尼と話し合ったりして、寂しさを慰めてもらえたので、秋までは滞在してもらった
- ③ 歌を詠んだり、音楽を演奏できたりする知人もできたので、このまま心が慰められる機会があれば、秋までは滞在しようと思つた
- ④ ありがたい仏様はいらっしゃるものの、修行者や尼に歌や音楽の遊びに誘われて気が休まらないので、秋までは出かけるいことにした
- ⑤ ありがたい仏様がいらっしゃり、歌を詠んだり、音楽を演奏できたりする知人もできて、心が慰められる機会があるので、秋までは滞在した

問七 次のうち『とはずがたり』と最も近い時代に成立したのはどれか。適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は

85。

- ① 古事記
- ② 枕草子
- ③ 十六夜日記
- ④ 古今和歌集
- ⑤ 好色一代男

この頁は白紙です

三ウ 次の文章を読み、後の問に答えなさい（設問の関係上、訓点を省いた部分がある）。

江<sup>(注1)</sup>南<sup>(注2)</sup>吉州<sup>(注3)</sup>刺史張曜<sup>(注4)</sup>卿有<sup>(注5)</sup>二兼力<sup>(注6)</sup>一日<sup>(注6)</sup>陶俊<sup>(注6)</sup>性謹直<sup>(注6)</sup>嘗<sup>(注6)</sup>從<sup>(注6)</sup>軍征<sup>(注6)</sup>  
江<sup>(注7)</sup>西<sup>(注7)</sup>為<sup>(注7)</sup>飛石所中<sup>(注7)</sup>因<sup>(注7)</sup>有<sup>(注7)</sup>二腰足之疾<sup>(注7)</sup>恒<sup>(注7)</sup>扶<sup>(注7)</sup>杖<sup>(注7)</sup>而行<sup>(注7)</sup>張命<sup>(注7)</sup>守<sup>(注7)</sup>舟<sup>(注7)</sup>  
於<sup>(注8)</sup>廣陵之江口<sup>(注8)</sup>因<sup>(注8)</sup>至<sup>(注8)</sup>白沙市<sup>(注8)</sup>中<sup>(注8)</sup>避<sup>(注8)</sup>雨<sup>(注8)</sup>於<sup>(注8)</sup>酒肆<sup>(注8)</sup>同<sup>(注8)</sup>立<sup>(注8)</sup>者甚<sup>(注8)</sup>衆<sup>(注8)</sup>  
有<sup>(注9)</sup>二書生<sup>(注9)</sup>過<sup>(注9)</sup>於前<sup>(注9)</sup>獨<sup>(注9)</sup>顧<sup>(注9)</sup>俊相<sup>(注9)</sup>与<sup>(注9)</sup>言<sup>(注9)</sup>曰<sup>(注9)</sup>「此人<sup>(注9)</sup>好<sup>(注9)</sup>心<sup>(注9)</sup>宜<sup>(注9)</sup>為<sup>(注9)</sup>療<sup>(注9)</sup>  
其疾<sup>(注9)</sup>」即<sup>(注9)</sup>呼<sup>(注9)</sup>俊<sup>(注9)</sup>与<sup>(注9)</sup>藥<sup>(注9)</sup>二丸<sup>(注9)</sup>曰<sup>(注9)</sup>「服<sup>(注9)</sup>此<sup>(注9)</sup>即<sup>(注9)</sup>愈<sup>(注9)</sup>」乃<sup>(注9)</sup>去<sup>(注9)</sup>俊<sup>(注9)</sup>歸<sup>(注9)</sup>舟<sup>(注9)</sup>吞<sup>(注9)</sup>  
之<sup>(注9)</sup>良<sup>(注9)</sup>久<sup>(注9)</sup>覺<sup>(注9)</sup>二腹中<sup>(注9)</sup>痛楚<sup>(注9)</sup>甚<sup>(注9)</sup>頃<sup>(注9)</sup>之<sup>(注9)</sup>痛<sup>(注9)</sup>止<sup>(注9)</sup>疾<sup>(注9)</sup>亦<sup>(注9)</sup>都<sup>(注9)</sup>瘥<sup>(注9)</sup>操<sup>(注9)</sup>篙<sup>(注9)</sup>理<sup>(注9)</sup>纜<sup>(注9)</sup>尤<sup>(注9)</sup>  
覺<sup>(注9)</sup>二輕捷<sup>(注9)</sup>白<sup>(注9)</sup>沙<sup>(注9)</sup>去<sup>(注9)</sup>城<sup>(注9)</sup>八<sup>(注9)</sup>十<sup>(注9)</sup>里<sup>(注9)</sup>一<sup>(注9)</sup>日<sup>(注9)</sup>復<sup>(注9)</sup>還<sup>(注9)</sup>不<sup>(注9)</sup>以<sup>(注9)</sup>為<sup>(注9)</sup>勞<sup>(注9)</sup>後<sup>(注9)</sup>訪<sup>(注9)</sup>二<sup>(注9)</sup>書<sup>(注9)</sup>  
生<sup>(注9)</sup>竟<sup>(注9)</sup>不<sup>(注9)</sup>復<sup>(注9)</sup>見<sup>(注9)</sup>。

(注1) 江南 地名

(注2) 吉州 地名

(注3) 刺史 長官

(注4) 張曜卿 人名

(注5) 廉力 召使い

(注6) 陶俊 人名

(注7) 江西 地名

(注8) 広陵 地名

(注9) 白沙 地名

(注10) 酒肆 酒屋

(注11) 篙 船を進めるための竿さお

(注12) 纜 船を岸に繋ぐための綱

問一 傍線部分(1)「嘗」、(8)「竟」の読みとして、最も適当なものをそれぞれ一つ選び、マークしなさい。解答番号は

(1) 、(8) 。

- |     |       |       |       |        |        |
|-----|-------|-------|-------|--------|--------|
| (1) | ① やがて | ② かつて | ③ なめて | ④ すでに  | ⑤ ころみに |
| (8) | ① すでに | ② さかい | ③ ついに | ④ おわりて | ⑤ きそいて |

問二 傍線部分(2)「為飛石所中」の書き下し文として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 飛石の中あたる所と為り
- ② 飛石の中る所と為し
- ③ 飛石の中の所と為り
- ④ 飛石の所に中ると為し
- ⑤ 飛石為に中る所なりて

問三 傍線部分(3)「宜為療其疾」の意味として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 陶俊の病気はきつと治るに違いない
- ② 陶俊の病気は今にも治ろうとしている
- ③ 陶俊のために病気を治してあげてください
- ④ 陶俊のために病気を治してあげるのがよい
- ⑤ 陶俊のためにどうして治療してあげないのか

問四 傍線部分(4)「即」、(6)「乃」の意味として、最も適当なものをそれぞれ一つ選び、マークしなさい。解答番号は

(4) 、

(6) 。

- ① もし
- ② そこで
- ③ やっと
- ④ つまり
- ⑤ すぐに
- ⑥ そのたびに

問五 傍線部分(5)「与薬二丸」について、「二書生」はどうして「薬二丸」を与えたのか。最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 107。

- ① 急いで故郷に帰るために、船を操る陶俊が病気のままでは支障があると思ったから
- ② かつて戦争で戦った陶俊に偶然会い、傷つけてしまったことを申し訳なく思ったから
- ③ 病気になるまで主人にこき使われている陶俊のことを、とてもかわいそうに思ったから
- ④ 陶俊の難病を治すことで、自分の持っている医学・薬学の知識を誇示しようとしたから
- ⑤ 陶俊の様子を見てよい心を持つ善人であることが分かり、善報を受けるべきだと考えたから

問六 傍線部分(7)「不以為劳」に付ける返り点として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 108。

- ① 不<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>劳
- ② 不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>劳
- ③ 不<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>劳<sub>一</sub>
- ④ 不<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>劳<sub>一</sub>
- ⑤ 不<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>劳

問七 傍線部分(9)「不復見」の意味として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 再び会うことがあるか
- ② 今度もまた会えなかった
- ③ 二度と会うことはなかった
- ④ もう一度会えないだろうか
- ⑤ なんとまた会えたではないか

問八 本文の内容に合致するものとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 陶俊はたび重なる激務で病気になったが、尋ねてきた二人の名医にもらった妙薬を飲んで元気になった
- ② 陶俊は船で旅をしている途中に大病を患い、街の中でもらった薬を飲んだところかえって病気が悪化した
- ③ 陶俊はけがをしさらに病気にもなったので、医者を求めて船で旅をし、ついに妙薬をもらって治すことができた
- ④ 陶俊は戦争でのけがにより病気になったが、船で出かけた時に街で薬をもらい、それを飲んで、病気はすっかり治った
- ⑤ 陶俊は仕事中大けがを負ったが、二人の道士にもらった薬を飲んで特殊能力を身につけ、船を操る名人になった